

【完全を目指す】

わたし達を取り巻く森羅万象は、全て思考で理解できる訳ではありません。理解を超えた、人智を超えたモノがあることは、体験として、実感として、真摯に出来事を受け止めていくと感じられる事です。

その人智を超えたモノを古代では、「神」と呼んでいました。雷が鳴るのは神が怒っているからだ、雨が降るのは神が泣いているからだ、と当時の人類は、人智を超えた出来事を神の仕業と捉えていたのです。しかし、目まぐるしい勢いで科学が進歩し、様々な事象が科学的に解明されていったのも事実です。そういったプロセスで、わたし達はより次元の高いところで、自然現象を生活に活用したり、上手く付き合えるようになってきたのです。

しかし、もちろん全てが解明できたわけではなく、未だにその研究や解明は進んでいます。

科学には公理というものがあります。万有引力の法則、慣性の法則など、事象を解析する大前提の法則を「公理」と呼びます。

そして、自然現象を解明する根底に公理が存在するのです。

しかし、『この世に「公理」がなぜ存在しているのか？』『公理は、誰が、もしくはどのようにできたのか？』

その答えを多くの科学者が「神」としか言い様がないと口を揃えて語るのです。

さらに、死生観については、科学で解明できる範囲ではありません。死んだらどこに行くのか、死後の世界は存在するのか、古くは宗教がその法則を説き続けています。そして、わたし達は、多くの方が熱心に宗教を信仰していなくとも、死後の存在を信じていて、それがこの世で良心に反する行動の抑止力になっている事も確かです。

つまり、この世で善行を行う事で、死後、より素敵な場所に行くことができる。そしてわたし達は生まれ変わり、現世で悪行を行うと魂が汚れて、生まれ変わった時に更に苦しい思いをしなければならなくなる。という、表現は違えどこのような考えが根付いているのではないのでしょうか。

この項では、この考え方そのものを言及するのではなく、「神」と呼ばれる存在について記述していきます。

まず、脳大成理論では、宗教で言うところの「神」、心理学全般で言うところの潜在意識、もしくはユング心理学で言うところの集合性無意識（宇宙意識）、またはスピリチュアリズムで言う「宇宙」は『全体』であり『完全』という概念で定義します。

ですので、神＝潜在意識＝宇宙＝全体・完全 と考えます。

脳大成理論では、「なりたい自分になる」または、「可能性を見だし、その実現に立ち向かう」「己の脳を使い切る」事が、一般に定義し提唱している人生の目的であると伝えていきます。

脳大成理論 1-1

その前提で未来に向かうのであれば、もちろんのこと、今以上に自分を高めよう、広げようという発想になるはずです。

そこで「完全」について考えてみます。

完全には、英訳すると2つの意味が表れます。

1つは、PERFECT・パーフェクト です。

これは、不完全を排除し、更に磨き、削り、無駄を排し、完成されたモノ、つまり完璧なモノである。という意味です。

辞書では、『完全な、申し分のない、理想的な、そろっている、欠けていない、正確な、寸分たがわぬ、純粹の、まったくの、』という意味であると記載されています。

もう一つの意味が、COMPLETE・コンプリート です。これはよくDVDなどが発売される時に、〇〇DVD完全版などと表現されたりしますが、辞書の意味としては、『全部の、完璧(かんぺき)な、(…を)完備して、完全な、まったくの、完成して、まとまっていて』というように記載されています。

つまり、「パーフェクト」の完全さとは、無駄を全て排し、不完全さを有していない状態という意味であると考えることができ、

「コンプリート」の完全さとは全てを有している状態という意味であると考えられます。

例えば、神をパーフェクトであると考えたと、なぜ神は完全なのに、悪を存在させるのか！？という疑問や葛藤が生まれますが、神がコンプリートであると考えたとその答えは明確です。完全がゆえに、悪も含め全てを有しているという事になるのです。

脳大成理論で考える『全体・完全』とはCOMPLETEを指します。つまり、全てを包含している。故にメカニズムそのものであり、宇宙を創造する意思（※1）であると定めています。

※1 意思をメカニズムと定義し、意志を人の意識上の決断や断行する精神性と定義します)

ここで重要なのは、わたし達には明らかに現実の世界（この世・三次元）と魂の世界（あの世・四次元以上）とが存在し、スウェデンボルグが言うように、現世はその2つの世界が混在しています。

ですので、脳大成理論では、魂の目と現実の目の両方から見つめる事が、本質を見だし、そして人生を選択する上で必要であると提唱します。

その最適な割合は、「魂の目6：現実の目4」なのです。

脳大成理論 1-1

この2つの世界観は全く相違したメカニズムで構成されていると考えていいでしょう。

わたし達は、現実には生きていますが、「現実だけ」に生きている訳ではありません。脳は情報を受信する装置であると定義されていますが、その情報がどこから来ているのか、わたし達を誕生させ、そして生存させている根幹はどこにあり、何なのか、それは科学では未だに想像の域を出ていません。

故に、魂（表現は多様性を持つべきなので、魂でも、素粒子以下のエネルギーでも、宇宙エネルギーでも、生命でも構いません）という視点が必要で、この視点を持つ事で思考を矛盾なく成立させる事ができます。

※現実と魂についての考察は以後言及していきます。

わたし達を取り巻く現代社会は、資本主義で運行されており、その土台は経済です。経済は質ではなく、量で計られるモノです。

故に損得で考え、無駄を排し、不必要を取り除き、完璧なものを、つまりパーフェクトなサービスを、商品を、情報を求められます。

つまり、仕事は、経済活動は、パーフェクトを求められているのです。

クライアントによくある思考が、仕事の成果と自身の人間性を共通化させてしまうというものです。しかし、仕事は、経験と技術と知識によって成り立っており、人間性を評価されるモノではありません。これも、今までの経済人や成功者が混同して表現してきた事で生まれている混乱でしょう。

仕事の成果と人間性は決してイコールではありません。むしろ別であると考えべきでしょう。

しかし、同時にわたし達は人生を生きています。そして、人生には仕事以外の重要な要因がたくさんあります。家族・友人・生きがい・健康・志などです。仕事はあくまでその一部です。

ですので、人生における最終着地点である「なりたい自分」はパーフェクトではなく、コンプリートを目指すべきなのです。

無駄を排し、不必要を取り除き…ではなく、全てを包含できる自身を目指すべきなのです。

それこそが豊かな人間性であり、脳を使い切る生き方であると言えます。

『仕事はパーフェクトに、人生はコンプリートに。』

これこそを、わたし達が目指すべき指針として定めていきましょう。